
氷の王子と炎の花嫁

ほしの すばる

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

氷の王子と炎の花嫁

【Nコード】

N6737U

【作者名】

ほしの すばる

【あらすじ】

赤い髪と瞳を持つ少女、リイズは、オーラジン王国では忌み嫌われる存在だった。そんな彼女に王子の花嫁になってほしいと王都からの使者が訪れた。二つ返事で承諾したリイズだった。そんな彼女を待っていたのは、『氷の王子』と呼ばれるアブサルークだった。花嫁としての教育を王妃からの直々に受けるリイズだったが、いじめにも等しい指導にくじけそうになるのだった。しかし、アブサルークへの対抗意識とアブサルークの異母弟であるエテミドの励ましで、何とか乗り越えようとしていたのだが。

「掟なんてくそ食らえーっ！」

リイズは高くそびえる防壁に作られた狭間から青空に向かって大声を張り上げた。嫌なことがあると自室を飛び出して、トレビ城の敷地内で人気のない場所を探してはストレスを発散するのが日課になりつつあった。

幾分か落ち着きを取り戻すと、狭間から身を乗り出して眼下に広がる大陸を見下ろす。潮の芳香を含んだ温かな海風が、太陽の光に輝く金色の髪をなびかせていく。

オーラジン王国。別名『黄金の国』とも呼ばれている。大海に囲まれた小さな島国でありながら、鉱石、特に金に恵まれ、他国との貿易で財を築き上げたと言われている。更に他国と比べて希有なのが、天空に浮かぶ王都ディフアランドだった。王都全体は防壁に囲まれ、城内で働く者たちは政治を司る元老院の厳しい試験に合格した、国民の中でもエリート中のエリートばかりである。

「でも、もう二度とあそこには戻りたくないし」

リイズは北方にあるイルダツカ山脈を不快な気分で見つめた。オーラジン王国では鉱石を産出する宝の山とされている。しかし、リイズにとってはいい思い出のある場所ではなかった。

十三歳の時に唯一の家族であった鉱山作業員の養父を亡くした。養父の遺志を受け継いでリイズも鉱山作業員として三年間働いてきた。過酷な労働を強いられる日々を過ごしてきたリイズに千載一遇のチャンスが訪れたのは二週間前のこと。ディフアランドから彼女を王子の花嫁として迎えたいと使者がやってきたのだった。

二つ返事で承諾し、ディフアランドに召喚されたリイズだったが、いじめにも等しい厳しい花嫁修業の毎日 zu んざりしていた。だが、鉱山での生活を思い出すとそれも耐えることができた。上流階級の礼儀作法も覚えてしまえばどうということはない。

そんなリイズにとって一番の悩みというのは……。

「お父さんとの約束を実現するためならこの際どんな王子でもかまわないと思っていただけ、どんな人なのかちゃんと聞いておくべきだったわよね。あれなら、まだ能なしアホ王子の方がマシってものだわ」

リイズは後悔の渦に飲み込まれながらも狭間から体を抜くと、諦念してテレビ城へ戻ろうとして踵を返す。

「！」

いきなり眼前に人が立っていたので、思わず目を閉じる。

「こんな所で何をしている？」

聞き覚えのある、どこか棘のある声に、リイズは閉じていた目を見開いた。

リイズの赤い双眸には、濡れたような漆黒の髪と深海のような濃い青色の瞳を持つ青年が映っていた。体躯のいい長身には金と銀の刺繍を施した衣服をまとっている。

オーラジン王国王位継承権第一位のアブサルーク・ストウーラ・デイフアラントである。性格は冷血漢で、侍女たちの間では『氷の王子』と囁かれている。そして、一週間後にリイズと結婚の儀を執り行う相手でもある。

「アブサルーク？ ビックリさせないでよ。いつからそこに？」

「能なしアホ王子の方がマシか？ 自分のことを棚に上げてよく言えたものだ。しかも、こんな所で泣きごとを言うようでは」

アブサルークが挑発的な笑みを浮かべる。どうやらアホ王子の件からいたらしい。

「泣きごとなんて言っていないわよ。ただの息抜きよ。でも、言いたくはないけど、王族って性格の悪い人が多いのね」

リイズも負けずとため息交じりに皮肉る。

「俺の花嫁になるのならそれくらい耐え抜いてみせろ。それとも、しっぱを巻いて鉱山作業員の生活に戻るか？」

「誰が戻るって言ったのよ！ 私、絶対に負けないから！ 見てな

さいよ。あんたが泣いて喜ぶような花嫁になつてやるから！」

「ならば、さつさと城へ戻れ」

感情が昂ったリーズに、アブサルークは冷たく言い放つ。

「はいはい、わかりました王子様」

リーズは抑揚のない返事で大仰にお辞儀をすると、トレビ城に向かって走り出した。

振り返ることなくドレスの裾を持ち上げて全力で走り去っていく
リーズの後ろ姿を見送りながら、アブサルークは微笑する。

「まさか本当に赤い髪と瞳を持つ女がいたとはな……」

リーズは部屋に戻ると、金色の髪を鷲掴みにして放り投げる。その下からは燃え盛る炎のような赤い髪があらわになる。

「何よ、あのえらそうな態度！ 王子だからって何言っても許されると思ってるわけ？ 鉱山でもあんなムカツク奴はいなかったわよ。あー、思い出しただけで腹が立つー！」

怒りの矛先を枕にぶつける。やわらかな羽毛の枕は、リーズの鉄拳を何度受けてもふわりと元の形状へと戻っていく。

「だいたい何だって私みたいな女を花嫁なんかにしたのよ……」

リーズは寝台の上から鏡に映った自分の顔を見つめた。鏡の中の赤い双眸がこちらを同じように見つめていた。

リーズに与えられた部屋は王室がある南の塔から離れた北の塔にあり、外出は禁止され、ほぼ軟禁状態に近かった。歓迎されていないことは一目瞭然だった。

昔からオーラジン王国では、赤は血の色として不吉の象徴とされてきた。そのため、リーズはデイファラントに来てから赤い髪を隠すため常に金色のウィッグをつけることを強いられていた。さすがに瞳の色だけはどうすることもできず、特定の侍女以外と接することは禁じられた。結婚後もこのような軟禁状態が続くのかと思うと、リーズは憂鬱になった。

リーズは幼い頃に東南にあるクワテボという小さな漁師町の沿岸に打ち上げられ、当時神父をしていた養父に救ってもらった。養父の話によれば、異国の船が嵐か何かで難破してオーラジン王国まで流れ着いたのだろうということだった。リーズの他に人は発見できなかったものの、船らしき残骸が多数打ち上げられていたのが何よりの証拠。しかし、リーズの身元を証明するものは発見できなかった。憶えていたのは、自分の名と母親らしき女性と旅をしていたということだけだったらしい。

命拾いしたリーズだったが、その容姿のおかげで物心ついた時には皆から忌み嫌われる存在となっていた。そんな愛娘を不憫に思った養父は母国に帰してやりたいと思うようになり、膨大な費用がかかる船旅の路銀を稼ぐために自らイルダツカ山脈の鉱山で働くことを選んだ。しかし、元来力仕事に向いていない養父は過酷な労働の日々に耐えられず床に伏すようになり、ついには二度と目を覚ますことはなかった。

一人残されたリーズは、赤い髪を見えないように布で覆い隠し、鉱山作業員として働いた。養父の遺志を受け継ぎ、どこにあるのかわからない母国にいつか帰ることを夢見て。

「お父さんと約束したもんね。自分の国に帰ってみせるって」

王子と結婚すれば権力と財力を使って、自分の母国を探し出すことができる。リーズはそう信じていた。

「そのためなら愛のない結婚だって……我慢してみせる」

言った後で極度の自己嫌悪に陥り、顔を枕に押し当てる。

「やっぱりそんなのやだ！」

今まで鉱山でむさ苦しい男ばかりを相手にしてきたリーズにとって『王子』という存在はとても魅力的なものだった。天空に浮かぶデイファラントを見上げては王城での生活に憧れを抱いたこともあった。しかし、実際の王子を目の当たりにして、その憧憬が打ち砕かれたのは言うまでもなかった。

「どうしてあんなのが王子なのよ！」

リーズは先刻のアブサルークの言動を思い出して、再び怒りの気持ちをつつと沸き上がらせ、枕を鏡に向かって投げつける。

肩を怒らせて鼻息荒くしていると、控えめなノックの音が聞こえてきた。リーズは慌ててウィッグをつけると、扉を開ける。

黄金色の長髪の青年が遠慮がちに入ってくると、急いで扉を閉めた。アブサルークと同様に金と銀の刺繍を施した衣服を身にまとっている。どこかバツの悪そうなその表情は、まるでいたずらをした子供が親に怒られないために隠れようとしているように見えた。

オーラジン王国王位継承権第二位のエテミド・ストウーラ・ディフ
アラント。アブサルークの弟である。

「良かった、部屋に戻ってくれていて」

エテミドは安堵の息をもらす。

「どうかしたの？」

「リイズ、ダンスのレッスン中に逃げ出したのでしょうか？」

「あ、そういえば」

リイズはあからさまに顔を引きつらした。

リイズの教育係は王妃であるキャサレーヌが直々に行っていた。
王妃自らが教育係を買って出たということだったが、王族の掟だの
マナーだのと叩きこまれ、リイズは真綿で首を閉められているよう
な苦痛を感じていた。侍女たちもリイズに接する態度は冷酷なもの
だった。

今までの鬱憤と、ダンスのレッスン中にドレスの裾を故意に踏ま
れたことが引き金になり立腹して逃走したというのに、アブサル
ークに会ったことでそのことをすっかり忘れてしまっていた。

「母上たちがあなたにきつくあたっているのは知っています。それ
を苦痛に感じて、城から逃げ出したいのなら、僕は協力しますよ」

リイズは首を横に振った。

「ありがとう、エテミド。でも、私なら大丈夫」

「ならば、ここはすぐに母上に謝ってください。今ならまだ許して
くれるはずです」

「許してはくれないと思うのだけど」

おそらく王妃の目的はリイズを追い出すことにある。こんな恰好
のネタを放っておくはずがない。今頃は国王に進言しているはずだ。
それがわかっているだけに、王妃の策略にまんまと引っかかってし
まった自分が腹立たしかった。

「僕もいっしょに謝りますから」

「いっしょに、って、エテミドは何も悪いことはしていないじゃな
い？」

「それはそうですが……」

「エテミドは優しいね。あのアブサルークと兄弟とは思えない。あー、あなたが私の王子様だったらよかったのに」

エテミドが困惑の表情を浮かべるのを見て、リイズは微苦笑する。彼女の髪の色を知っているのは王族と元老院の者だけだった。

「こんな私じゃ迷惑よね？」

「いえ、そんなことはありません。リイズはとても美しいです。でも、あなたは兄上が焦がれた理想の女性ですから」

「私が？」

今度はリイズが困惑の表情を浮かべた。

「オーラジン王国の王族は短命が多いため、王子は十八歳になると戴冠式を執り行います。そのためには十八歳になるまでに結婚していなければなりません。しかし、兄上は元老院が薦めてくる王族筋の女性を断り続けて、赤い髪と瞳を持つ女性以外とは結婚する気はないと言ったそうです。二週間前にガスニアがあなたを連れて戻ってきた時には安堵しました。兄上の十八歳の誕生日まで日数があまり残っていませんでしたから。あなたは数年かけてやっと見つけた兄上の理想の花嫁なのです」

「どうしてアブサルークはそんなことを？」

リイズはオーラジン王国で自分と同じ容姿を持つ人間に出会ったことはいなかった。それくらいこの国では希少な存在ということだ。リイズがいなければアブサルークは王位を継承することはできなかった。わざわざそんなリスクを背負って一国の王子が他の結婚相手を頑なに拒んで、不吉とされる赤い髪と瞳を持つ女性を花嫁に選ぶ理由が理解できなかった。

「リイズ、僕をよく見てください」

エテミドに真摯な眼差しを向けられ、リイズは一瞬胸が熱くなるのを感じた。

初めて会った時もあったが、エテミドの髪は眩しいほどに見事な黄金色を放っている。そして、双眸は雲ひとつない澄んだ青空のよ

うにきれいな色をしている。リイズにしてみれば理想の王子像といえよう。

「国王を始めとして、王子はみな王たる証として黄金の髪を持つと言われています。これは王位継承のもうひとつの条件です」

「でも、アブサルークは……」

黒い髪をしている。

リイズは出かかった言葉を思わず飲み込んだ。触れてはいけない。そんな気がした。

リイズが押し黙っていると、それを察したエテミドが優美に微笑む。

「あなたになら兄上も本当の気持ちを打ち明けてくれるかもしれないね」

「無理！ あんな冷酷王子……って、ごめんなさい。エテミドにとつては大切なお兄さんだものね。アブサルークがちよつとうらやましいな。私にはもう家族と呼べる人は誰もいないから」

「そんなことはありませんよ。リイズはもう僕の大切な家族の一員なのですから」

「ありがとう、エテミド。こんなに優しくしてくれたのはお父さんの他にはあなたが初めてよ」

リイズはエテミドの両手を取って満面の笑みで感謝の意を伝えた。それだけ嬉しくてたまらなかったのだ。

「では、母上に謝罪を」

エテミドが言いかけて、扉が開いた。

「もう手遅れです」

王妃キャサレーヌが黄金色の美しい髪を撫でながら柳眉を逆立てて入ってきた。その後方には、柄に親衛隊の証でもある鷹の紋章が刻まれた片手剣を腰に携えた親衛隊隊長のガスニアが跪いていた。

「母上？」

「キャサレーヌ様？」

リイズは握っていたエテミドの両手を慌てて離す。

「エテミド、この部屋に入ってはならないと何度も言っておいたはずですよ」

「申し訳ありません」

「早く自分の部屋にお戻りなさい」

キャサレーヌに叱責されたエテミドは、まるで捨てられた子犬のようにしゅんとうなだれて部屋から出ていった。

「やはり下々の者に王族のしきたりを理解するのは難しかったかしら?」

「申し訳ございません、キャサレーヌ様。慣れぬ王都暮らしゆえ」
「その抑揚のないしゃべり方。感情を押し殺した目。あの子と同じですわね。まあ似た者同士でお似合いかもしれせんけど」

キャサレーヌは憎悪に満ちた言葉を吐き出した。『あの子』がアブサルークを指していることはリイズにもすぐに理解できた。

（前々から思っていたけど、キャサレーヌ様はアブサルークのことを相当憎んでいるみたいね）

弟のエテミドは兄を慕っているというのに。

「本来ならば陛下の許しがなければあなたのような下女はここにいないことすらできないことをよく覚えておきなさい」

キャサレーヌの卑下した言葉に、リイズは唇を噛みしめて耐えた。
（ここで引き下がるわけにはいかないのよね）

アブサルークにだけは負けたくはない。

そんな強い信念がリイズの態度を豹変させた。背筋を伸ばし口元を引き締めると、ドレスの裾を持ち上げて頭を垂れた。

「キャサレーヌ様、今までの非礼はお詫びいたします。ですから、もう一度だけ私にチャンスをください」

予想外のリイズの謝罪に、キャサレーヌは一瞬たじろぐ。

「私としてはあなたに花嫁を辞退してもらいたいところですが、陛下があなたのことを大変気に入っております」

「ブレスフォード王が?」

意外な人物の名にリイズは目を丸くする。ブレスフォード王は、

歴代国王と比べると異端児であり、元老院からの圧力には屈せず、国民からの賦役を軽減したことで絶大な支持を受けている。その国王に謁見したのは、一度だけだった。言葉すら交わしていないというのに、気に入られる要素が何ひとつ思いつかなかった。

「とにかく、あなたに王都の生活をいち早く覚えてもらうために側近をつけることにしました」

「まさか？」

リーズはキャサレーヌの後ろに控えているガスニアに目を向けた。「あのキャサレーヌ様。お言葉を返すようですが、ガスニアさんは男性で……その私はアブサルーク様の花嫁で……やはりここは女性の方がよろしいのではないのでしょうか？」

「あなたの逃げ足についていける侍女はこの城にはおりません」

一喝され、言葉を失うリーズ。

「では、ガスニア、後は任せましたよ」

「あ、あの、キャサレーヌ様、このことをアブサルーク様は？」

「言い忘れていましたが、罰として今夜の食事はなしとします」

リーズの問いに答えることなく、キャサレーヌは無情な言葉を残して去っていった。

（どうしてこういうことになっちゃうわけ？）

跪いたままのガスニアに、リーズは視線を向ける。黙っていればいつまでも頭を下げていそうな雰囲気である。

「ガスニアさん、もう立つてもいいんじゃないですか？」

「ご命令ならば」

「命令ってわけじゃないですけど、とにかく立ってください」

「かしこまりました」

ガスニアが立ち上がると、リーズの視線が下から上へと一気に変わる。

亜麻色の短髪と端正な顔立ちは、いかにも生真面目な家臣といった感じである。二十歳という若さながら元老院からの信頼は厚く、王都の護衛だけでなく国政に関わることも多い。二週間前に鉦山に

リーズを訪ねてきたのもガスニアだった。無表情で何を考えているのかわからないところがあり、リーズは苦手だった。しかも、側近として何をしてもらっていいのかわからず、困惑するばかりだった。

「側近って部屋の中にいつしょにいるものなのですか？」

「いえ、私はお部屋の外にいますので、ご用があればいつでもお呼びください」

「あ、ありがとうございます」

リーズはぎこちない笑みを作って扉をゆっくりと閉めた。

気が付けば、太陽は沈み、室内は薄闇に包まれていた。開け広げたバルコニーの窓からひんやりとした風が入ってくる。

「何とか首の皮一枚つながったかな」

リーズはバルコニーに出ると、手すりにもたれかかった。

ゴゴ。

地響きのような鈍い音が聞こえた瞬間。

「っ！」

リーズはもたれかかっていた手すりごと自分の体が引力によって転落していくのを感じ取った。

（嘘？）

伸ばした手は空を掴み、急速に落下していく。

空が遠くなっていく。このまま落ちていけば間違いなく自分は死ぬだろう。そう思った瞬間、リーズは声にならない悲鳴を上げていた。

刹那、落下速度が止まる。

「コーネ？」

リーズは自分の体が白い毛並みのコーネの背中に支えられていることを知った。

コーネとは全長三メートルほどの羽根が生えた希少な獣であり、ディファラントにのみ生息するとされている。ディファラントに召喚される際に一度だけ乗ったことがあった。

「まったく、どうしてこんな女をアタシの背中に乗せなきゃいけないのよ」

そして、他の獣に比べて卓越しているのは、人語をしゃべることである。ちなみに、このコーネはメスらしい。

「何、この生意気なコーネは？」

「あんたなんかアブサルーク様の命令じゃなかったら助けなかったんだからね」

「アブサルーク？ あなた、アブサルークのコーネなの？」

「ち、ちがうわよ！ アタシは通りすがりの野生のコーネ。たまたまあんたが落ちていくのが見えたから助けてあげただけ。しつこいようだけど、たまたまだからね！」

嘘であることが明白なくらいコーネは狼狽しくついていた。コーネは元老院によって飼育が管理されているため、野生のコーネなどは存在しない。百歩譲って野生のコーネがいたとしても、厳重な警備網をかいくぐって城の敷地内に侵入することは不可能である。

「まあそういうことにしておいてあげるわ。じゃあ野生のコーネちゃん、ご主人様の所へ私を連れて行ってくれるかしら？」

リーズはコーネの首を背後から羽交い絞めする。

「ちょ、ちよつと放しなさいよ！」

コーネはジタバタと暴れて抵抗するが、鉾山で鍛えた腕っ節は伊達ではない。リーズは徐々に力を込めてコーネの首を絞めつけていく。

「く、苦しい……。何なの、このバカ力は」

「アブサルークの所へ連れて行ってくれる気になったかしら？」

「わ、わかったわよ！」

「最初から素直にそう言えばいいのよ」

コーネが耐えきれずに根を上げると、リーズはコーネの首を解放し満面の笑みを浮かべた。

コーネが降り立ったのは、高い塀に囲まれた小さな庭園だった。

手入れの行き届いたキレイな庭に、リイズは思わず固唾を呑む。

「何しにきた？」

ガゼボの中にいたアブサルークは不機嫌そうな表情でリイズを一瞥する。

「私を助けてくれたコーネの主にお礼を言いに来ただけよ」

「ならば、他をあたれ」

「おかしいなあ。私はコーネにご主人の所に連れて行けって言ったんだけど」

アブサルークとリイズの視線を一身に受けて、コーネは長い尻尾を丸めた。

「それにしても、こんな場所があつたなんて気が付かなかった」

「人々の目に触れぬよう、ずいぶん前に閉鎖してしまったからな」

「こんなにキレイな花がいっぱい咲いているのに？」

「それはアブサルーク様が手入れをされているからに決まっているじゃない」

「ダイナ！」

アブサルークに一喝され、ダイナと呼ばれたコーネは体を小さく丸めて押し黙る。

「このやかましい女をさっさと連れて帰れ」

「いやよ。私はお礼を言うまでは絶対帰らないから」

「好きにしろ」

頑として引き下がらないリイズに、アブサルークは背を向ける。

「へえ、ここからだとは北の塔がよく見えるのね」

リイズは堀の狭間を覗き込むと、部屋のバルコニーを見上げた。あのまま落下していれば間違いなく命を落としていただろう。そう考えただけで背筋に冷たいものが走った。

「ありがとう、アブサルーク」

「……………」

しかし、アブサルークからの返事はない。

しばらくの重い沈黙の後、口火を切ったのは意外にもアブサルーク

の方だった。

「笑いたければ笑え」

「笑わないわよ。ちょっと意外だったけど、安心した。花を愛でることが出来る人だってわかったから」

「お前、よくそういう恥ずかしいことが平気で言えるな」

「別に恥ずかしいことなんて何も言っていないわよ」

バツが悪そうなアブサルークに対して、リイズは胸を張って断言する。

「思っていることが素直に言える奴なんてエテミド以外にはいないと思っていたがな」

「お兄さん思いのいい弟じゃないの。王妃は誰かさんに似ているけど」

リイズが小声で呟く。

「悪いが、俺はあの女とは血の繋がりは無い」

「え？」

「この際だから、言っておく。あの女は自分と血の繋がりがあるエテミドに王位を継がせたいと思っている。だから、俺の花嫁となるお前の存在が邪魔なのだ」

リイズが小首を傾げるのを見て、アブサルークは眉間にしわを寄せるとため息をもらした。

「キャサレー又は俺を産んだ母親ではないということだ。わかったか？」

「あー、そういうこと」

そこでやっとすべてを理解したリイズが両手を合わせて叩いた。キャサレー又がアブサルークに嫌悪感を抱いていた理由。それは自分とは血が繋がらないアブサルークが王位を継承することが気に入らなかったのだろう。そして、アブサルークが十八歳の誕生日までにリイズと結婚しなければ王位継承権は失われ、弟のエテミドが十八歳までに誰かと結婚してしまえば次期国王になれるというわけだ。だから、アブサルークの花嫁になる私をいびって追い返そうとし

ているわけ？」

「そういうことだ。だが、正直俺は結婚する気もなかったし、王位を継ぐ気もなかった」

「なら、最初からみんなにそう言えばいいじゃない？」

リーズの助言にアブサルークは苦笑する。

「父上には昔からずつと言ってきた。しかし、父上は俺にしか王位は継がせないと元老院の奴らに公言してしまった」

「それであるかどうかもわからない赤い髪と瞳の女としか結婚しないとか言ったわけ？」

「幼い頃に父上から他国に伝わるという赤い髪と瞳を持つ女騎士の伝説を聞いたことがあった。その女騎士は未曾有の危機から国を救って英雄になったという」

「私とは逆ね」

自分はいつも人からも国からも疎まれてきた。リーズは寂しい表情を浮かべる。

「俺はその女騎士にあこがれた。だが、この国にはそんな女はいないと思っていた」

「私がアブサルークの計算を狂わせたってこと？」

「そうだな。お前と出会った瞬間に俺の計算はすべて狂った」

アブサルークはリーズの赤い髪にそつと触れた。

いつもとは違うアブサルークの穏やかな表情に、リーズは戸惑った。

「お前の髪も瞳も燃え盛る炎のようだ。きっと女騎士もお前のような女性だったのだろうな」

「みんなはそんな風には言ってくれなかった。不吉を招く血の色だつて」

「俺の髪の色、どう思う？」

「どう、つて？」

リーズは返答に躊躇しているのを見て、アブサルークは王位継承の条件を彼女が知っていることを悟った。

「知っていたのか？」

「だけど、私は好き！」

「！」

意表を突かれたアブサルークは、頬を紅潮させた。それを見たりイズは咄嗟に口から出た言葉の重大さに気付く。

「あ、そ、その、髪の色ことだからね。まあこんな私に言われても嬉しくないかもしれないけど」

「いや、そんなことはない」

「……………」

リーズはアブサルークの顔を凝視した。

「あなた、本当にアブサルーク？」

「どういう意味だ？」

「だって、別人みたいに素直なんだもの」

いつもならこんなことを言えば、冷めた態度で一喝されてしまうところだ。しかし、今のアブサルークは寂しげな表情を浮かべる孤独な少年ようだった。

（こっちが本当のアブサルークなのかもしれない）

リーズはエテミドの言葉を思い出した。

——あなたになら兄上も本当の気持ちを打ち明けてくれるかもしれない
ませんね。

「この庭のせいかな」

「この庭？」

リーズは庭内を見回した。

中央にある乾いた噴水を囲むように色鮮やかな花が咲き誇っている。毎日丹念に世話をしなければこんな立派な大輪は咲かないだろう。

「ここは俺を産んだ母上が大好きな場所だったらしい」

「ごめん、私……………」

「気にすることはない。俺には母上の記憶はないからな」

夜のひんやりとした風が二人の頬を撫でていく。花たちも風の音

と共にざわめきだす。

「俺の髪の色が黒だったばかりに、元老院から国王の子であるはずがないと詰問され、身の潔白を晴らすために自ら命を絶ったそうだ」

前王妃サマーラは王族筋の娘で、オーラジン王国一の美貌の持ち主で見事な黄金色の髪をしていたという。当然、プレスフォード王も金髪である。そんな二人の間から黒髪の赤ん坊が産まれるなどあってはならないことだった。

「里子に出されるはずだった俺は母上のおかげで王子として城に残ることができたが、城の者たちは俺を『汚れた王子』と陰口し、罵ってきた。父上はそれを負い目に思っている。だから、元老院の反対を押し切っても俺に王位を継承させたいのだろう。それは俺にとっては重荷でしかなかった。だから、俺は父上に王位継承を諦めさせるためにずいぶんと非道なこともしてきた。お前にも……」

「もういい。もう何も言わなくていいから」

リーズの眼前にいる今のアブサルークこそが彼の本来の姿なのだろう。冷酷な言動もそんな弱い自分を隠すために虚勢を張っていただけなのかもしれない。そう思うと、今にも壊れてしまいそうなガラス細工のような心を持ったアブサルークを、リーズは抱きしめずにはいらなかった。

「じゃあ、今度は私の話聞いてくれる？」

「お前の？」

「だって、不公平でしょう？ 私ばかりがアブサルークのことを知ってしまったら」

リーズはアブサルークから離れると、柔らかな笑みを浮かべた。

「私たちの結婚は止めにしましょう」

「は？」

自分の生い立ちをすべて話した後のリーズの突拍子もない発言に、
アブサルークは啞然とした。

「だから、私はアブサルークとは結婚しないと云っているの」

「なぜ急にそんなことを言い出す？」

「アブサルークは私と結婚しなければ国王にならなくてすむわけでしょう？　だったら、こうするのが一番じゃないの」

「しかし、お前は自分の故郷を探したいのだろう？」

「そうだけど、私はアブサルークの人生を踏み台にして自分だけが幸せになるうとは思わない。旅費ならまた鉦山に戻って稼げばいいことだわ。あそこは賃金だけは良かったしね」

「バカなことを言うな。あそこの生活がどんなに過酷かは俺だって知っている」

「大丈夫だって。こう見えても私体力だけは自信があるんだから」
リーズは両腕を掲げると力こぶを作って見せる。

「それに、アブサルークだって私がいらない方がせいせいするでしょう？」

「もう手遅れだ」

「え？」

アブサルークはリーズの腕を引き寄せ、力強く抱きしめた。

「お前という温もりを知ってしまった以上、手放す気にはなれない」
「アブサルーク……」

「言っただろう。お前は俺の計算をすべて狂わせた、と」

アブサルークは今までにない鼓動の高鳴りを感じていた。初めて人を愛おしいと思った。そして、アブサルークの胸に顔を埋めたりイズもまた彼の心臓が激しく脈打つ音を聞きながら、自分の心臓も同様であることに気付く。

（私、アブサルークのこと好きになってる？）

リーズはゆっくりと顔を上げ、アブサルークを見つめる。吐息が

かかるほどの距離に顔が近付いていく。

二人の唇が触れる瞬間。

「リーズ様！」

甘い時間の終わりを告げる声が響いた。

アブサルークとリーズはまるで反発しあう磁石のように弾けて離れる。

「ガスニアさん？」

薄闇の中から、ガスニアが姿を現す。

只ならぬ気配を感じてリーズの部屋に入ったガスニアは、彼女がコーネに助けられてこの庭園に降りていくのを見て駆けつけてきたのだった。

しかし、アブサルークがいるのを知り、慌てて片膝をつき頭を下げる。

「失礼致しました。アブサルーク様が一緒とは存じませんでしたので」

「かまわん。それよりなぜガスニアがリーズを？」

アブサルークはいつもの冷たい双眸でガスニアを見下していた。

「キャサレーヌ様より本日付を以ってリーズ様の側近を命じられました」

「親衛隊隊長のお前にか？」

「はい」

「よほど俺の花嫁が大事と見えるな」

アブサルークは王室がある南の塔の方角を見上げると、忌々しげに吐き捨てた。

「なら、さっさと部屋へ連れて戻れ」

アブサルークはリーズの体を引き寄せると、

「これからは俺以外の者に気を許すな。古いとはいえ、バルコニーの手すりが壊れたというのは腑に落ちんからな」

小声で囁き、ガスニアに預ける。

「俺の大切な花嫁だ。しっかりと部屋に送り届ける」

「かしこまりました。その前にリイズ様、これを」

ガスニアが差し出したのは、金色のウィッグだった。転落の際にはずれてしまったのを拾ってくれていただろう。

「ありがとうございます」

リイズはウィッグをつけると後ろ髪を引かれる思いで、ガスニアと共に庭園を後にした。

「とんだ、恋の落とし穴だな。愛した女のためにまさかこの俺が王位を継承する気になるとはな」

アブサルークは両腕に残ったリイズの温もりを感じながら自嘲した。

結婚の儀の前夜にもかかわらず、城内は相も変わらずの静寂を保っていた。

リーズの容姿を国民や他国に知られないために、国賓の招待は一切なく、婚儀は王族のみで密かに執り行われることになっていたからだ。

（リーズ、あなた本当にこれでいいの？）

リーズは修復されたバルコニーに出ると、自問自答を繰り返した。あの日以来、アブサルークは王妃キャサレーヌの教育指導の場に立ち会うようになった。そのおかげで嫌がらせの類はなくなった。しかし、侍女たちの手前もあり、アブサルークとともに会話を交わすことができなかった。日が暮れてから庭園に行こうとしたが、ガスニアの監視網は予想以上に厳重で、さすがのリーズも容易に部屋を抜け出すことはできなくなっていた。

「ねえ、私はどうすればいい？」

澄んだ夜空に浮かぶ三日月に向かって問いかける。

（私にはアブサルークの自由を奪う権利なんてどこにもない）

やはり結婚は止めよう。自分さえいなくなれば、アブサルークは王位を継承しなくてもすむ。しかし、扉の向こう側にはガスニアが常に待機している。そう簡単に部屋からは出られない。

「やはりここは王道で脱出するしかない、か……」

リーズは寝具から絹のシーツをはぎ取ると、それを細長く引き裂き、一本の長い紐を完成させる。バルコニーの手すりに紐を頑丈に縛りつけると、下に垂らす。さすがに地上までは届かないが生い茂った木につかまれば何とかなるだろう。

「ごめん、アブサルーク。あなたのこと一生忘れないから」

胸が締めつけられた。アブサルークとの別れがこんなにも自分に

苦痛を与えるとは、リイズは思ってもみなかった。

リイズはあふれそうになる涙を堪え、バルコニーの手すりを越えようとした時。

「何をしている？」

頭上から不機嫌そうな声が降り注いだ。

見上げると、口調と同じく不機嫌そうな表情のアブサルークがダイナに乗って見下ろしていた。

「あ、これはその……鉱山で流行りの健康体操で、別に城から脱出しようとしていたわけではなくて」

リイズが狼狽していると、アブサルークは苦笑した。

「このじゃじゃ馬め」

「そういうアブサルークだって。表から堂々と来ればいいのに、わざわざダイナを使って会いに来ることはないじゃない」

「まったく、口の減らない女だな」

アブサルークはバルコニーに降り立つと、リイズの体を優しく抱き寄せた。リイズはアブサルークの背中に手を回そうとして、一瞬手を止めて、彼を引き離す。

「聞いて、アブサルーク。やっぱり私はあなたと結婚できない」

「またその話か？」

アブサルークはあからさまに怪訝な顔をして見せた。

「そんなに俺と結婚するのが嫌か？」

「嫌とかではなくて、私……アブサルークの足枷にはなりたくないの」

「なら、王子ではない平民の俺となら結婚してくれるのか？」

リイズは答えに躊躇した。確かにアブサルークが王子でなければ何の問題もないかもしれない。しかし、今まで何の不自由もなく生きてきた彼が平民の生活に耐えられるはずがない。自分と引き換えに王子の肩書きを奪うわけにはいかない。それでは、リイズが身を引く意味がないからだ。

「お前、俺をそこら辺の世間知らずの王子といっしょにするなよ。」

これでも、十八歳には城を出て世界を旅するつもりで、それなりの準備はしてきたのだからな」

「旅？」

「ああ。こんなちっぽけな島国で人生を終わらせるつもりはない。俺は世界が知りたいんだ」

そう言ったアブサルークの瞳はまるで面白いおもちゃでも見つけた子供のようにキラキラと輝いていた。

「どうして十八歳なの？」

「王位継承権があるうちに飛び出すと、ガスニアの奴に見つけられて城に戻されるからな」

バツが悪そうなアブサルークの表情を見て、それが体験談であることを悟ったリイズは思わず吹き出してしまう。

「お前な」

「ごめん。何か想像できちゃって」

「まあいい。とにかく、選べ。王子の俺が、何の肩書もない俺が。これが最後のチャンスだ」

「そんなの決まってる！」

リイズは金色のウィッグを投げ捨て、アブサルークに抱きついた。後悔してもしらんぞ」

「それはアブサルークの方がもよ？ やっぱ王位を継げばよかった、なんて思っても遅いんだからね」

「思うくらいなら、他の女とさっさと結婚していたさ」

「それもそうね」

二人はしばし見つめ合って小さく笑った。

「ちよつと早いが、誕生日のプレゼントもらってもいいか？」

「いいけど。私、アブサルークにプレゼントできるようなものは何も持っていないわよ」

「そんなことはない」

アブサルークは指先でリイズの顔を自分に向けると、やさしく口づけた。

「俺はこれから父上の所に行つて、もう一度俺の気持ちを伝えてくる。お前はここで大人しく待っている」

「うん、わかった」

アブサルークはダイナに乗って国王の部屋がある南の塔に向かって飛び去った。

アブサルークと離れずにすむ。そう思っただけで、リーズの心は躍った。

「やはり兄上も甘いですね」

背後からの声にリーズは振り返った。エテミドが開け広げた扉にもたれかかっていた。しかし、いつものような温厚な雰囲気を感じ取れず、リーズの胸に一瞬不安がよぎった。

「エテミド、いつからそこに？　ここに来たらまたキャサレーヌ様に叱られるわよ」

「大丈夫ですよ。今ここにいるのは僕とリーズの二人だけですから」歩み寄るエテミドに、リーズは思わず後ずさる。

「表にはガスニアさんがいたはずだけど？」

「彼は働きすぎなので今は休んでもらっています」

エテミドは後ろ手に隠していた片手剣を眼前に出した。血塗られたその剣の柄には鷹の紋章が刻まれていた。

「まさか、その剣はガスニアさんの？」

ガスニアはオーラジン王国随一の剣豪と称されていた。油断していたとはいえ、丸腰のエテミドに倒されたとは信じられなかった。

「みんな僕のことを見くびり過ぎていたようですね」

冷笑を浮かべるエテミドを見て、リーズは背筋が凍る思いがした。

「エテミド、どうしてこんなことを？」

「この僕が国王になるためですよ」

「アブサルークは国王になるつもりはないのよ。私と二人でディフアラントから出ることにしたの。だから、国王になれるのはエテミドしかないのに」

「だから、甘いと言ったのですよ。父上は何としてもアブサルークに王位を継承させたいのです。前王妃との約束のためにね」

「前王妃の？」

「あなたも知っているでしょう？ アブサルークの髪の色で前王妃が自ら命を絶ったことを」

リーズは小さく頷いた。

「前王妃は、アブサルークは間違いなく国王の子であるから王位を継承させてほしいといった遺書を残していたそうです」

前王妃サマーラは命を賭してアブサルークの未来を守ろうとしたのだろ。子を思う母の気持ちは何よりも強い。

「僕の母は前王妃の代わりにと即座に国王に嫁がされ、十六歳で僕を産みました。しかし、国王……父上は母上も僕も愛してはくれなかった」

「そんなことない。プレスフォード王はエテミドのこともキャサレーヌ様のことも愛していらっしゃるわ」

「あなたに僕たち王族の何がわかるのですか？ 現に、僕は母上の笑った顔を一度も見ることがない。だから、きっと僕が国王になれば母上も喜んでくれるはずですよ」

リーズは沈痛な面持ちでエテミドを見つめた。王族の華やかな表しか見ていなかった自分には、その裏側にある確執に気付くことができなかった。彼の心に巣くった闇を見ようとしなかった浅はかな自分を叱責した。

「母上のために死んでください」

「もしかして、バルコニーの手すりには……」

「そうですね。あれは僕が細工しました。けど、アブサルークのお

かげで失敗しましたけどね」

しかし、それがきっかけでリイズとアブサルークの恋は一気に加速した。が、逆にエテミドはアブサルークへの憎悪を駆り立てた。

「あなたがいなくなれば、アブサルークは失意のどん底に落ち、王位継承権も失う」

「そんなことしたら、あなただって王位を継承できなくなるわよ！」

「大丈夫ですよ。僕の罪はガスニアが被ってくれます。不吉の象徴である赤い髪的女を王妃にすることが許せなくなったガスニアがあなたを殺害した後に自ら命を絶ったというシナリオだね」

エテミドが構えた片手剣を振り下ろした。

刹那。

閃光が走った。

「何？」

リイズとエテミドの間に、片手剣を構えたアブサルークがいた。

「どうしてここに？」

驚愕するエテミドに、アブサルークは皮肉の笑みを浮かべる。

「ダイナが血の臭いがすると言ったので、気になって戻ってきてみればこの有様だ！ ガスニアの手当てを優先させたいで来るのが遅れた！ リイズ、無事か？」

「私は平気。それよりもガスニアさんは？」

「安心しろ。あいつはそう簡単に死んだりはいしない」

ガスニアの無事を知り、安堵するリイズ。

「リイズ、お前は下がっている！」

アブサルークはリイズを背中を押しながら後退させると、エテミドを睨めつけた。

「お前の演技にはさすがの俺もすっかり騙されたぞ、エテミド。どういうことか説明してもらおうか？」

「説明する必要はないでしょう？ 計画が狂ってしまいました、こうなったらあなたにもいつしよに死んでもらいましょう。そうすれば、あなたも王位を継がなくてすむ。その方が嬉しいでしょう？」

「兄思いの弟を持って俺は幸せ者だな。だが、強くなったのは自分だけだと思うなよ！」

二つの剣が火花を散らしながら激しくせめぎ合う。互角の戦いといえた。

しかし、剣を振るうエテミドが泣いているように思えてリイズは仕方なかった。トレビ城に来てからずっと優しい言葉をかけて励ましてくれたのはエテミドだった。本来の彼はやはり心根の優しい青年ではないのだろうか。ならば、無益な戦いは止めさせなければいけない。これ以上、エテミドに罪を重ねさせてはいけない。そう思った瞬間、リイズの体は自然と動き出していた。

「もう止めて、エテミド！」

リイズはエテミドの前に大手を広げて立ち塞がった。

エテミドの剣光がリイズに向かって閃いた。

「リーズ！」

アブサルークは叫んだ。

切っ先はリーズの大きく見開かれた眼前で止まっていた。気が遠のきそうになるのを堪えるのが精一杯で、全身の力は萎えていき、その場にへたり込んでしまう。

「やっぱりエテミドは優しいね」

リーズは恐怖で顔を引きつらせながらも、エテミドに微笑みかけた。

エテミドの手から片手剣が滑り落ちていく。その表情から闘争心は消え、まるで憑きものが落ちたかのように思えた。

「あなたさえ現れなければ、黙っていても王位は僕のものになるはずだった。だけど、僕にはあなたは殺せない」

エテミドは震える声で小さく呟く。頬を伝う涙が真実の姿を現していた。

「それでいいのです、エテミド」

息子の異変をいち早く察知していたキャサレーヌが悲壮の表情で室内に入ってくると、エテミドを抱きしめた。

「こんなにもあなたを追いかんできました母を許してちょうだい」

「母上、僕は……」

キャサレーヌは泣きすぎるエテミドの頭を優しく撫でてやると、おもむろにリーズの前に平伏した。気位が高いと思われていた王妃の所作に啞然とした。

「あなたには辛く当たってしまったことを深くお詫びいたします。あなたが花嫁になるのを辞退してくれば、王位が必然的にエテミドのものになると思ったのは事実です。ですが、同時にエテミドを愚考に走らせないためでもありました」

「もしかして、ガスニアさんを私の側近にしたのは」

「そうです。エテミドの暴挙からあなたを守るためでした。結果的には、ガスニアにも申し訳のないことをしてしまいました」

キャサレーヌのリーズに対する言動はすべてエテミドのためだったのだ。子を思う母の気持ちと、母を思う子の気持ちがお互いを思うあまりにすれ違いを生み、このような事態を招いてしまったのかもしれない。リーズはそう思った。

「私はエテミドと共にこれから陛下の元へ行き、すべてを打ち明けてまいります」

「その必要はない」

威厳のある低い声が、室内にわだかまった不穏な空気を一新した。バルコニーには風格のある壮年の男性が立っていた。雰囲気はどこかアブサルークに似ている。その傍らには、ダイナが控えていた。

「プレスフォード王？」

リーズは驚愕の声を上げ、その場にいた一同が一斉に頭を垂れた。「すべてはアブサルークのコーネから聞いた。私はサマーラとの約束を果たそうとするばかりにそなたたちの気持ちに気付いてやれずに本当にすまないことをした。今回の一件は私の不徳の致すところ」

プレスフォード王はお互いをかばい合う母と子に謝罪の言葉を述べた。

「だが、私はそなたたちをサマーラやアブサルークと同じように愛しいと思っていたことだけはわかってほしい」

「陛下、そのようなお言葉もつたいない」

キャサレーヌは涙を流しながら一言一言を真摯に受け止めていた。

「しかし、エテミドにはガスニアを傷つけた罪は償ってもらわねばならん。よって、五年間の国外追放を命じる」

エテミドは黙することで罰を受諾した。すると、アブサルークが意を決したような表情でプレスフォード王の前に跪いた。

「恐れながら、陛下に申し上げます。ガスニアを傷つけたのは俺です。追放するのなら、この俺を」

アブサルークの虚偽の申し立てが、国外追放によって消失するエテミドの王位継承権を守るためであることは一目瞭然だった。

「何を言うのですか、兄上。ガスニアは僕が」

俺が、僕が、という口論がしばらく続き、呆れたブレスフォード王がそんな二人を一喝した。

「ならば、二人とも国外追放でよろう」

「兄上は明後日には十八歳の誕生日を迎えるのですよ？ それでは兄上も王位継承権を失うことになります」

「いや、いいのだ、エテミド。最初から望んでいたことだ」

「掟なんてくそ食らえ、だ」

「あ！」

ブレスフォード王の言葉に、リイズは思わず声を上げた。数日前に、ストレス発散時に叫んだ言葉と同じだったからである。おそらく、どこかで聞いていたのだろう。

「古い掟などにいつまでも縛られていては国の発展はない。広い世界を見て回り、それから王位を継承しても遅くはないだろう。のう、アブサルークの花嫁よ？」

「そ、そうですね」

リイズは羞恥心に顔を紅潮させて、アブサルークの後ろに隠れた。そんなリイズを見てアブサルークとエテミドは首を傾げた。

「明日は息子たちの門出だ。キャサレーヌよ、侍女たちにすぐに祝宴の準備をさせよ」

「陛下、お立場を考えください。王子たちを国外追放するというのに宴などと。そんなことをすればまた元老院の反発を買うことになるのですよ」

「そうかたいことを言うな。そのような難しい顔ばかりしては美人が台無しだぞ」

豪快に笑うブレスフォード王を見て、キャサレーヌは照れくさそうに小さく微笑んだ。

初めて見た母の笑顔に、エテミドが感涙したのは言うまでもない。

笑顔がこんなにも人を幸せにすることができると知ったリーズは、アブサルークの手を握りしめながら、いつまでもこうして笑っていられる日々が続くことを祈った。

「どうしてお前がここにいるのだ？」

「僕は今まで王都から一步も出たことがないので。そんな僕に一人で旅をしろというのは酷な話でしょう？」

あからさまに不機嫌な顔のアブサルークとは対照的に、エテミドは涼やかな笑みを浮かべていた。

昨夜の出来事がまるで嘘のような晴天に恵まれた青空の下、オーラジン王国の南にある大きな港町、ヤグに降り立ったリーズたちだった。

二人の王子を国外追放することは元老院からの猛反対を受けたが、ブレスフォード王は頑としてそれを譲らなかった。本日執り行うはずだった結婚の儀も当然中止となり、リーズの容姿を隠すため公にできなかったのが不幸中の幸いと言えた。

「遠慮という言葉を知っているか？ お前はもつと思慮深い男だと思っていたが」

「僕も兄上がこんなに大人げない性格だったとは知りませんでしたよ」

「反省の色がまったく感じられん！」

「そんなことはないですよ。ねえ、リーズ？」

エテミドの長く美しかった黄金色の髪は短く刈られていた。たった一晩ですいぶんたくましくなったように思えた。

「まあいいじゃないの。人数が多いほうが楽しくて」

「俺はお前と二人きりで旅がしたいのだ」

「ひどーい、アブサルーク様。ダイナのことも忘れないでくださいよ」

ダイナがアブサルークの足に擦り寄る。

「ったく、俺の計算は狂ってばかりだ」

アブサルークが肩を落として大きなため息をつくのを見て、リイズは小さく微笑んだ。こんな風に愛する人たちと旅ができるとは思ってもみなかった。そんな喜びを与えてくれたブレスフォード王に心から感謝した。

「さあ行くわよ！」

リイズはアブサルークとエテミドの手を引っ張って走り出した。

三人と一匹の旅は始まったばかりだ。

おわり

vol. 5 (後書き)

最後まで読んでくださってありがとうございます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6737u/>

氷の王子と炎の花嫁

2011年7月12日03時27分発行